令和4年度　国語部会研究計画

１　研　究　主　題

自律的に学ぶ子供が育つ国語科学習の創造

―言葉による見方・考え方を働かせ，考えを形成し，共有する単元の構想と展開―

２　研究主題設定の理由とその考え方

○…参考引用文献

●…本会の定義等

（１）主題について

①　未来予測の困難な時代に求められる教育

現在，我が国の教育は，コロナ禍の影響も相まって，ＧＩＧＡスクール構想が強力に推進されるなど，その転換期にある。渦中にあるからこそ，ポストコロナにおけるこれからの教育の在り方を考えなければならない。

また，現行の学習指導要領がコロナ禍以前に執筆されたものであることを踏まえると，同書に加えて，中央教育審議会答申等を拠りどころとしながら※1，コロナ下やポストコロナにおける教育の在り方を追求していく必要がある。

このような状況下において，私たち指導者が，どのような学習者を育てるべきかを考えることは喫緊の課題と言える。そこで，本会は，社会の変化が複雑であり，極めて予測が困難な時代だからこそ，自らの学習の状況を把握しつつ，主体的・協働的に学習を自己調整しながら課題解決していくことのできる「自律的に学ぶ子供」を育てることが肝要であると考えた。

この「自律的に学ぶ子供」の育成をめざす研究は，自らの学習課題を設定し，その解決に向けて思考・判断・表現を重ねるとともに，学習の記録等を元に，学習の節目で自己の取組を振り返りつつ，修正や変更を加えていくことができる子供の育成を目指した「単元学習の理念を生かした指導」に関する研究と軌を一にするものである。このような子供主体となる学びの創造は，未来予測の困難な社会において，これまで以上に求められる教育の在り方である。

そこで，本年度より，研究主題を「自律的に学ぶ子供が育つ国語科学習の創造」とし，本会のこれまでの研究の蓄積を生かしながら研究を深めていくこととした。

②　「自律的に学ぶ子供が育つ国語科学習」を創造するために

本研究が育成を目指す「自律的に学ぶ子供」は，自らの学習の状況を把握しつつ，主体的・協働的に学習を自己調整しながら課題解決していく過程において，学習指導要領に整理された資質・能力を調和的に備えていく子供である。

このような「自律的に学ぶ子供」が育つ国語科学習を創造するためには，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善やカリキュラム・マネジメントの確立を図ることが特に重要である。その際には，多様な子供たちを誰一人取り残すことなく育成する「個別最適な学び」※2と，子供たちの多様な個性を最大限に生かす「協働的な学び」※2の観点から学習活動の充実を図ることに留意したい。

また，「自律的に学ぶ子供が育つ国語科学習」を創造するために，教師は，子供一人一人に，主体的に課題を見出す力や課題に向かって学び続ける意欲，自己の学習を把握して調整する力，学習を振り返って次の学習や生活に生かそうとする力などの学習力を育成する必要がある。本研究は，これらの学習力を育成することによって，子供一人一人が国語科における資質・能力をいかに効果的に獲得していくことができるようになるかを追究するものである。

※1
○令和3年1月26日中央教育審議会の「「令和の日本型学校教育」の構築を目指して（1月答申）」や，令和3年3月版の「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料（３月資料）」を拠りどころとする。

※2
「個別最適な学び」と「協働的な学び」
○「指導の個別化」と「学習の個性化」を学習者の視点から整理した概念が「個別最適な学び」である。（3月資料p.8）
○探究的な学習や体験活動などを通じ，子供同士で，あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら，あらゆる他者を価値のある存在として尊重し，様々な社会的な変化を乗り越え，持続可能な社会の創り手となることができるよう，必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実することも重要である。
（1月答申　p.１８）
●これらは，単元学習の「個が生きる」「分かち合い」という理念にそれぞれ通ずる。

（２）副主題について

副主題は，前年度と同様とした。なぜなら，副主題「言葉による見方・考え方を働かせ，考えを形成し，共有する単元の構想と展開」に関する研究が，「個別最適な学び」，「協働的な学び」と関わっており，本研究主題の探究に資すると考えるからである。

本会は，これまでに副主題「言葉による見方・考え方を働かせ，考えを形成し，共有する単元の構想と展開」に関する研究を進め，「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善を行ってきた。この副主題で研究を進めていくに当たって，「個別最適な学び」と「協働的な学び」の観点から学習活動の充実を図ることにより，子供が自己調整しながら自らの課題を探究したり，他者との関わりを通して自分の思いや考えを広げたり深めたりする「自律的に学ぶ子供」の育成がより一層期待できる。

また，考えの形成と共有を螺旋的に繰り返すことによって，「個別最適な学び」の成果を「協働的な学び」に生かし，更にその成果を「個別最適な学び」に還元するなどの，「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実が可能となると考える。このようにして，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげていくことによって，本研究主題「自律的に学ぶ子供が育つ国語科学習の創造」を実現することができるようになると考える。

①　子供が言葉による見方・考え方を働かせる[※3]ために

子供は，自らの課題を探究していく過程において，「なぜ，この言葉が使われているか」「自分の思いを表わすために的確な言葉はどれか」など改めて言葉に着目して（言葉による見方），思考力・判断力等を活用しながら吟味する（言葉による考え方）ことを通して，自覚的・能動的に言葉を用いることができるようになる。

教師は，子供一人一人に応じて，どの言葉に着目してどのように考えるかを幅広く捉え，さらに豊かな見方・考え方へと導くこと（指導の個別化[※4]）が必要となる。また，一人一人が自分の思いや考えに応じて，言葉による見方・考え方を選んで働かせることができるようにすること（学習の個性化[※5]）が，考えを形成したり共有したりする際の土台となる。

②　子供が考えを形成する[※6]過程において

子供は，学習材（文章・登場人物・作者など）や他者，自己との対話を繰り返すことによって，考えを形成する。その際には，言葉による見方・考え方を働かせ，自分の思いや考えをつくったり表現したりしながら，自らの考えを明確にしていくことができるようになる。

教師は，学習材（文章・登場人物・作者など）や他者，自己との対話を必然性のあるものにするとともに，対話の内容を焦点化していく必要がある。また，子供一人一人に応じて，対話を通して考えを形成し，共有したいという意欲を高めていくことができるよう，「指導の個別化」と「学習の個性化」を図ることが重要となる。

③　子供が共有する[※7]過程において

子供は，他者とかかわり，多様な考えと巡り合うことによって，自他の考えの特徴に気付いたり自分の考えをより明確にしたりすることができるようになる。また，このような「協働的な学び」を発達に応じて自覚的に経験することによって，言葉を学ぶ集団として，考えを広げたり深めたりさせようとする態度が養われていく。

教師は，共有する学習活動を活性化するために，子供が自ずと共有するポイントを絞り，自他の考えを比較・検討したり結び付けたりする必然性のある場をつくることが重要である。その際，教師は，育てるべき国語科の資質・能力とともに，子供の対話すべき相手が明確化されるように配意する必要がある。

※3
○言葉による見方・考え方を働かせるとは，児童が学習の中で，対象と言葉，言葉と言葉との関係を，言葉の意味，働き，使い方等に着目して捉えたり問い直したりして，言葉への自覚を高めることであると考えられる。
（「小学校学習指導要領解説国語編」）
文部科学省

※4
○教師が支援の必要な子供により重点的な指導を行うなどで効果的な指導を実現することや，子供一人一人の特性や学習進度，学習到達度等に応じ，指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの「指導の個別化」が必要である。

※5
○子供の興味・関心・キャリア形成の方向性に応じ，（中略）教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで，子供自身が学習が最適となるように調整する「学習の個性化」も必要である。
（１月答申 p.１７）

※6
●本研究における，「考えを形成する」とは，課題の解決に向けて，「なぜ自分はそう考えたのか」しっかりと自分自身に向き合い，繰り返し問い続けながら自分の考えを明確にしていくことである。

※7
●本研究における，「共有する」とは，自分の考えを表現し，互いの考えを認め合ったり，比較して違いに気付いたりすることを通して，自分の考えを広げていくことである。

３　研究の内容と方法

（１）「考えを形成し，共有する単元の構想と展開」に関する研究

①　考えを形成する過程における指導の工夫

考えを形成する過程において，子供一人一人が自らの課題に対して既有の言語に関する知識や経験を想起し，相手や目的，場に応じて，言葉や学び方を選んだり結び付けたりしながら様々に考えることができるよう，指導を工夫する必要がある。特に，次の３点については，前年度の研究内容を引き継ぎ，「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させることに配意しながら研究を進めていく。

一つは，子供が自らの言語生活と深く結び付き，継続的に探究していく意欲を持つことのできる問いをつくるための支援をすることである。そのために，教師は，子供の興味・関心や必要感を育て，生活に根ざした問いが生まれるようにしなければならない。言葉による見方・考え方を働かせながら粘り強く探究し続けて，自分の考えを広げたり深めたりすることができる問いの開発に努めたい。

二つは，子供が自らの学びに応じて学習の手引きを選びながら活用していくことができるように，一人一人の学びの姿に即して学習を手引きすることである。子供が自分の思いや考えを見付け出したり整理したりすることができるように，具体的な言葉で観点や例を示すことなどの工夫が考えられる。

三つは，子供が自分の考えの深まりを実感できる言語活動を，探究していく過程に位置付けることである。特に，「書きながら考える」「考えながら書く」などの思考を伴う書く活動によって，その時々の自分の考えが広がったり深まったりしたことを自覚できるようにしたい。

②　共有する過程における指導の工夫

共有する過程においては，子供一人一人が必然性のある活動として，共有する目的を自覚していることが前提となる。そのため，共有する過程を通して，自分の学びの成果と課題を明らかにしたり，新たな考えを形成したりして自己調整[※8]することができるように，「必然性のある共有の場面が設けられているか」「共有する観点が明確化されているか」など，指導を工夫する必要がある。

共有する過程を通して考えを広げ深めていくためには，音声言語に限らず，文字言語による活動も積極的に取り入れたい。例えば，音声言語による対話的な活動[※9]を文字や映像によって可視化する手立てや，ＩＣＴ機器を活用するなどして書き合う・読み合う活動を取り入れるなどの指導の工夫も考えられる。

③　考えを形成し，共有する学びの評価[※10]の工夫

考えの形成と共有を螺旋的に繰り返していく中で，子供一人一人が学びの軌跡を振り返り，自己評価することが大切になってくる。

そこで，本会がこれまで取り組んできた「学習の記録[※11]」を効果的に活用したい。子供が自分の思いや考えを広げたり深めたり，学びを自己調整したりする目的をもって活用することが期待される。また，「学習の記録」を活用することを通して，子供が自身の考えの変容や成長，課題などに気付き，次の学びに対する意欲が高まるようにしたい。そのためにも，教師の学習記録を評価する力の向上も望まれる。

教師は，一人一人の「学習の記録」から，「子供がどのような意識をもって学んできたか」「子供の考えがどのように広がり深まってきたか」「子供の学びにはどのような意味や可能性があるか」「子供の興味や関心はどちらに向いているか」などを把握して，価値付けていく必要がある。

その際には，「学習の記録」をもとに，子供の姿からどのような変容や成長を捉えられるかなど，ＩＣＴ機器を活用しながら評価規準や評価場面，評価方法について検討する機会も設けたい。ＩＣＴ機器は，その内容を蓄積し共有していくことにも役立つため，指導と評価の一体化を図る一助となる。

※8
●本会における「自己調整」とは，知識及び技能を獲得したり，思考力・判断力・表現力等を身に付けたりするために，①自らの学習状況を把握して，②学習の目標を持ち，③進め方を見直しながら学習を進めたり，④その過程を評価して新たな学習につなげたりするなど，自らの学習を調整しながら学ぼうとすることである。また，上述した学習の方法面に限らず，自らの考えを他者の考えを折り合いをつけながら更新していくなどの学習の内容面に関するものも，本研究における自己調整に含む。
（平成28年・30年中央教育審会答申）

※9
●本研究における「対話的な活動」とは，子供同士の協働，教職員や地域の人との対話，先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ，自己の考えを広げ深める活動のことである。

※10
○「教師が指導の改善を図るとともに，児童生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにするため」の学習評価の重要性が指摘されている。
（「学習評価の在り方ハンドブック」）
文部科学省

※11
●学習の記録には，学習の手引きや成果物，振り返りなどの子供によって書き残されたものと，音声データや映像などのＩＣＴ機器によって蓄積されたものとが考えられる。

（２）国語科におけるカリキュラム・マネジメント[※12]に関する研究

「自律的に学ぶ子供」を育成するためには，教師が子供の視点に立って，「このカリキュラムを通して，子供はどのように学ぶか」「このカリキュラムは子供にとってどのような意味があるか」などと見直し，再構成していく過程において，より能動的に教育活動を展開していくことが求められている。

そこで，国語科において育成を目指す資質・能力を体系的に把握するとともに，子供や学校の実態と重ね合わせながら６年間を見通した年間指導・評価計画を作成・運用して，その学校の実態に応じた国語科教育の全体像を明確にしていきたい。全体像が明確になれば，「ある単元で基礎となる資質・能力を，いつ，どの単元で育成すればよいか」「ある単元で育成した資質・能力を，いつ，どの単元で発展させればよいか」など，単元間のつながりを見通すことができ，効率的な指導につながる。また，国語科における資質・能力の育成を図る上でも，教科等横断的な視点に立ち，他教科等との関連を一層考慮したい。

単元や授業においては，その時々の学習の状況を的確に評価して，学びの過程の再構成，指導・支援の工夫・改善などを行うことにより，一人一人の学びを深めていきたい。そのためにも，単元のどの段階で，どの資質・能力を，どのような方法で評価していくのかを明確にした評価計画の作成を進めていきたい。

※12
○カリキュラム・マネジメントとは，「児童や学校，地域の実態を適切に把握し，教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと，教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと，教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して，教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと」である。
（「小学校学習指導要領　総則編」）
文部科学省

（３）言語能力育成のための日常的な取組

①　語彙指導[※13]の充実

語彙は，全ての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤となる言語能力を支える重要な要素である。「言葉による見方・考え方」を働かせ，考えを形成し，共有する過程を充実させるためにも，思考を深めたり活性化させたりしていくことができるように語彙を豊かにすることが求められる。

語彙指導をする際には，学習指導要領に示されている各学年における語彙指導の重点を踏まえつつ，学習や日常生活の中で意識的に言葉を投げかけたり取り上げたりしながら，適切な使い方ができるように指導していくことが大切である。また，こまめに辞書や事典を利用して必要な語句等を調べる習慣を身に付けさせたい。

②　読書生活の充実

読書は，多くの語彙や表現を通して様々な世界に触れ，自分のこととして体験したり知識を獲得したりして，新たなものの見方や考え方に出会うことを可能にする。

子供の豊かな読書生活をつくるためには，日常的に読書に親しむ態度を養う指導に留まらず，その子供一人一人の発達に応じて，情報を収集したり考えを形成したりする際に役立つ読書へと系統的に高めていく必要がある。また，授業において，子供が目的に応じて図書を選んだり，目的に応じた読み方（精読・速読等）を選択したりするなどの指導を工夫したい。

③　「作文読本」の活用

「作文読本」を活用することは，書く習慣を身に付けるとともに，考えを形成することにもつながる。思考を伴う書く活動は，思考力の育成に大変有効である。

また，多数の読み手を有する「作文の広場」に作品を投稿する体験は，書くことへの強い意欲付けとなる。「練習」の例文や「作文の広場」に掲載された同学年の作文は，ねらいに沿った学習のモデルとなり，書く技能の向上のために活用することができる。他者の作文を読むことを通して，自分の作文を見つめ直す視点を得たり，作文を書く際の手がかりにしたりする活用方法もまた効果的である。

※13
○小学校学習指導要領（p.19）では，各学年における語彙指導の重点を次のように示している。

語句の量を増すこと
・第１・２学年
　身近なことを表す語句の量
・第３・４学年
　様子や行動，気持ちや性格を表す語句の量
・第５・６学年
　思考に関わる語句の量

語句のまとまりや関係，構成や変化について理解すること
・第１・２学年
　意味による語句のまとまりがあることに気付く
・第３・４学年
　性質や役割による語句のまとまりがあることを理解する
・第５・６学年
・語句の構成や変化について理解する
・語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して，語や語句を使う